

勝 海舟

2023. 10. 2 横浜歴研 高田 茂

1. はじめに

先般、ある団体の見学会で大田区の洗足公園を訪れた。その際近くの「大田区立勝海舟記念館」に立ち寄った。入口には、勝海舟の等身大の写真パネルが入場者を迎えていたが、背丈が私と全く同じ。これまで絵画等で見してきた西郷隆盛との会談場面では、座って描かれている場面が多く、こんなに小柄とは思っていなかった。この身体でよくも幕末を乗り切ったものだと感心し、興味が一気に湧いてきた。尚、洗足公園のほとりに海舟記念館があるのは、晩年海舟がこの地に「洗足軒」という別荘を建てた為だそう。更に、この公園の一角には海舟夫妻の墓所と南州留魂碑が残されている。

海舟の事績としては、咸臨丸の船長としてのアメリカ渡航往来や、幕末時の江戸無血開城での活躍等は耳にしていたが、果たしてどんな人物であったかをこの機会に考えてみた。

これまで幕末、明治維新に関しては、国内要因から記述されることが多く、教科書等でも明治政府の母体となった薩長の側に立っての記述が一般的であった。19世紀中葉のこの時代、欧米の先進国によるアジアの未開国への侵略が激しい時代であり、海外諸国との関係及び海舟の身辺に存した西郷隆盛や徳川慶喜、更には福沢諭吉等の存在も海舟の行動に与えた影響もかなりあったと思われる。これらを踏まえ海舟の一生を考えてみたい。

2. 幕末と外交

19世紀中葉は、世界の一体化が急速に進んだ時代であった。この時代をグローバルに捉えることで、日本が世界の一部であり、世界の動向の中で時代が進んでいくという相対的、総合的な視点が必要である。

イギリスはいち早く産業革命を達成し、1850年代から1870年代にかけ、自由貿易主義の黄金時代を迎えた。この勢いを受けてアジアの植民地支配を強力に進めた。イギリスの基本的な世界認識は、「自主の国」=ヨーロッパ諸国、「半主の国」=日本・中国・朝鮮、「無主の地」=インド・アフリカの多くの国というもので、1842年には中国とのアヘン戦争の結果南京条約を結び、1858年には天津条約、1860年には北京条約を締結し中国への経済的支配を強めた。一方インドに対しては、1840年代末のインド制服、1858年からの直接統治で支配を築き上げてきた。アヘン戦争は、東アジアでしか産出されない茶を入手する為に、アヘンを中国に売りつけたことによって起こった戦争である。背景には豊かなアジアの物産を求めるヨーロッパの現状があり、茶の輸入による大幅な貿易収支の赤字を、インド産アヘンの中国への不法輸出により補填せざるを得ない事情があった。イギ

リスの日本への開国要求の基礎には、列強の勢力均衡の状況のなかに位置する日本の地勢、日本の政治統合の高さ、イギリス海軍の能力の限界、西南諸藩の開明派の台頭などがあり、本国側としては、中国との通商関係を重視する一方、日本に対しては不介入の方針であった。更には、アヘン戦争及びアロー戦争の戦後処理にも追われており、腰を据えた対日戦略を描けずにいた。イギリスの公使であったオールコック及びパークスは、それぞれ個性が強く、独断での日本への介入もみられたが、本国はかなり慎重な対応であった。1863年（文久3年）の薩英戦争に対しても、「タイムズ」等のメディアは、木と紙でできた日本の住居への攻撃の非人道性を訴えており、イギリス政府も、遺憾の意を表明し、攻撃の中心となったクーパー提督の個人的責任があること、鹿児島での攻撃は文明国の間で行われている通常の攻撃に違反するものであることを認めた。一部ではあるが民主主義の母国らしい対応といえる。

イギリスに遅れて進出したアメリカにとっては、それまではアメリカ東海岸からヨーロッパを経て東まわりで東洋へ来ざるを得ず、長距離の航路の不便性が1846～8年のアメリカ・メキシコ戦争で西海岸のカリフォルニアを獲得したことにより、中国との貿易ルートの開拓、即ち太平洋横断航路の確保が重要となり、航路の安全確保が急がれた。鎖国日本が太平洋横断航路上に位置し、又良質炭の供給が可能な国が日本であり、より一層日本との友好条約の締結が急がれたのである。更には、この当時の照明用ランプ油としての鯨油を希求するアメリカ捕鯨業者の為に、燃料・食料の確保及び緊急避難港としての受け入れも、アメリカの要求の背後にあった。イギリスへの対抗意識もあり、かなり強引な対日攻勢となった。それがペリーの強硬的な来航の要因であった。

ロシアのプチャーチンは節度ある態度で日本との交渉にあたったが、ロシアとしては常に領土拡大の国家意思を持っていた。ロシアは1854年、イギリス・フランス・オスマン帝国との間でクリミア戦争を戦いその敗北を受け、それ以降日本との交渉は列強のなかの一国という対応であった。日本としては、隣国という立地もあり、ロシアとの対応には常に緊張を強いられた。

西洋諸国のなかで唯一鎖国時にも日本との交流を続けていたオランダは、イギリスとの争いのなかで国の存亡が危ぶまれる状況となり、かろうじて日本との交流を維持していたが、時代の進展とともにその存在意義は失われていった。ただし、継続的にもたらされた「オランダ風説書」は、完全に孤立していたわけではない幕府に海外の存在を認識させ続けていたが、それをどう取り扱うかは時の幕府の制約もあり、十全には利用されなかった。先進国で唯一の交流国であるオランダより情報を入手する為、蘭学の習得が海外情報入手の必須のアイテムであった。

このような国際的変動のなかで、日本は幕末を迎えたのである。

3. 海舟と西郷

海舟は長崎伝習所時代、咸臨丸にて鹿児島を訪問し、当時の雄藩藩主の代表的人物である島津斉彬に会っている。この背景としては、海舟が蘭学を修行していた20代、当時世子として江戸に在住して海外情報の入手に努めていた斉彬が、情報源の一人として海舟と知り合っていた経緯があった。この縁で、西郷は斉彬より海舟の名前ぐらいいは聞いていたかもしれない。海舟と西郷、両雄の最初の会談は、元治元年（1864年）に軍艦奉行であった海舟の大阪の宿舎を西郷が訪問。その時海舟から、今後幕府を見限り、有力諸侯が協力して欧米諸国に対処し、国是を定めるべきとの共和政治構想に接し、その発想のスケールの大きさに西郷がひどく驚かされ、その後海舟に敬意を抱く機会となった。二回目の会談が慶応4年・明治元年（1868年）の江戸城無血開城にあたっての時である。鳥羽・伏見での敗戦により徳川慶喜が東帰した後の幕府組織は、大久保忠寛（一翁）がその一員である「参政衆」が江戸城のトップであったが、海舟は慶喜の指示のもと交渉の責任者として、朝廷方の大総督府参謀である西郷と談判したのである。江戸城総攻撃が中止に至った要因としては、①天璋院篤姫及び静寛院宮（和宮）からの徳川家の存続を依頼する書状②イギリス公使パークスの謹慎した者への攻撃への反対③勝海舟・高橋泥舟・山岡鉄舟等の幕臣の尽力があったものと思われる。

洗足公園にある海舟の墓の横には、西郷の留魂碑が建てられその中の「ああ君よく我を知れり、而して君を知る亦我に若くは莫し」の言葉は、海舟の西郷評価としてよく知られているが、海舟の西郷談には、自分をも西郷と同等の人物として知らしめるある種の思惑が隠されているかもしれない。

西郷は途方もない器量と人間的魅力を持ち、且つ人格者で豪傑肌であるが、反面律儀で繊細な神経の持ち主であった。僧月照との入水自殺の経験は、西郷のその後の人生に大きな影響を与えており、常に死に場所を求めていた気配が感じられる。更に、西郷には維新変革の最大の功労者である西郷と、保守的な薩摩士族の一員として強烈に縛り付けられている西郷（特に国父島津久光との関係）の二面性がある。一方、海舟にも早くに幕府を見限った海舟と、東征軍に対して徳川を擁護した海舟の二面性がみられる。このような複雑な背景を持つ二人だからこそ、困難ななかにも最小限の被害に抑えられ、世界にも例を見ない政権交代である、無血開城がもたらされたものと思われる。

4. 海舟と慶喜

慶喜の父は水戸藩主である水戸斉昭、母は有栖川宮家の娘登美宮（吉子）であり、もともと朝廷に対する尊敬の気持ちは強かった家系であった。斉昭としては慶喜を世子慶篤のスペア―と考えていたが、一橋家の養子の話がもちあがったことで、将来の将軍の目もある

ことから、慶喜を一橋家に送り込む。慶喜は、弁舌もあり、頭の回転も速かったが、海舟のような「公」という一貫した判断基準はなく、常に状況判断に苦慮し、それが「二心様」というような不名誉な評価を受ける。ただ慶喜の内心には、皇室の血を受けた将軍という意識があり、それが「朝敵」という立場を受け入れがたい行動をとらせたと思われる。

海舟との直接の面会機会は比較的遅く、元治元年（1864年）2月の英・仏・米・蘭4か国の下関砲撃阻止の交渉を、当時将軍後見職の慶喜から命令されたのが初めてらしい。

幕末時における慶喜の大政奉還の大英断は、土佐藩の建白を受けた対応であったが、薩長側からは詐謀測るべからざるの老賊との見方をされ、一方佐幕派からは軽蔑と臆病者だとの烙印をおされた。又、幕府の敗北を決定付けた鳥羽・伏見の戦いにおいても、幼天皇を擁した薩長及び公家側の攻勢に対する情勢判断を誤り、幕府軍の武装兵の上京を許したことが政治的に致命傷を負う結果を招いた。それまで幕府の傍系官僚としての地位にとどまり江戸で事態の推移をみていた海舟は、慶喜東帰後軍事取扱に任命され、会計総裁・若年寄に任命された大久保一翁と共に、敗戦処理に当たらざるを得なかった。それは海舟が薩長側と人脈的に親しいということもあったが、当時、慶喜の為に命を懸けて交渉にあたる人材が幕閣にいなかったともいえる。慶喜の救命を第一の目的に交渉にあたっては、山岡鉄舟の働きもあり、敗者の側からすれば思いがけない好条件での談判結果となった。

慶喜の謹慎後、海舟の慶喜に対する課題は、徳川將軍家の存続と慶喜の名誉回復にあった。明治期の海舟は、何事につけ東京の宗家の背後にあって、慶喜及び一族のお目付け役をもって任じていた。このように元部下の海舟が、上司である慶喜を監視することの二人の関係性は微妙である。海舟と慶喜はウマが合わず、常にギクシャクしており、お互い陰で悪口を言いあいながらも別れることなく、誠に奇妙な二人三脚ぶりを発揮。晩年、海舟の息子小鹿の死を受け、養子として海舟が慶喜の十男精を願い出たことは、慶喜の気持ちの中に、安堵の心を抱かせたと思われる。

5. 海舟とは

海舟は、40俵の無役の貧乏旗本である勝小吉の息子であった。7歳の時將軍家斉の孫初之丞（12代將軍家慶の5男・一橋慶昌）の側近に召し出され、もし初之丞が存命であり將軍の地位につけば、海舟も側近として幕閣に取り入る道が開けたかもしれないが、現実には初之丞の若死により奥向きを去り自分で道を切り開いていかねばならなかった。16歳で家督を継いだ時は40俵の小普請組。海舟が立身した糸口となったのは、万国地図を見て感じるところがあって20歳頃から始めた蘭学である。それ以前から研鑽に努めていた剣術と座禅を土台として、劍の師匠島田虎之助から勧められたものである。蘭学の読習から始め福岡藩の蘭学者である永井青崖、幕府の馬屋同心隠居で隠君子ともいえる都甲谷太郎の薫陶を受け、世界に目を開いていった。特に25歳の秋に蘭日辞書『ゾーフ・

ハルマ』を1年10両の損料で借り、書写本を二部作り一部を売却し返済に充当。このように金銭的には苦しい家計であったが、わが国の前途を深く憂慮していた何人かの豪商達との接点が、権力の庇護がない海舟の蘭学研究に援助をもたらした。江戸の蘭書店で知り合った函館の豪商柴田利右衛門、彼の紹介による灘の喜納治郎作、伊勢の竹川竹斎、紀州の浜口梧陵等が、その後の海舟への金銭的支援を行い蘭学の研究の深化に役立った。

そうした中で海舟は、オランダ海軍提督であるキンスベルゲンの著書「舶中備要」を原書で読んでいる。そこでの成果を踏まえ、ペリー来航以前の嘉永6年(1853年)1月に、『懈行私言』を著して当時の世間に警鐘を鳴らした。『懈行私言』では、英雄を選挙すること、兵制を改めること、その為の言路を開くことを述べている。この本に記載されていることは、ペリー来航後、幕府が諸人から意見を徴した時、海舟が提出した海防文書「愚存申上候書付」に結実し、幕府海防掛目付である大久保一翁の眼にとまり、蘭書翻訳勤務に取り立てられた。つまり蘭学者及び兵学者というテクノクラートとしての海舟の実績が、その後の海軍畑の実務家としてのトップエリートとしての道を歩ませた。長崎海軍伝習生時代、一般伝習生の間では蘭語と数学が最大のネックであったが、蘭学者でもある海舟は誰よりも早くこれらを身に着けることができた。蘭語が話せたことが、海舟とオランダ教官との距離を縮め、そのかわりの中でオランダ教官から得た知識が、後に書き留めた一文『蚊鳴余言』に凝縮されている。そこには、海外知識、海軍の組織、軍制と軍人の心得、戦争の実態と各国の盛衰・興亡の歴史、世界の進運のなかにおける日本及び日本人のかたちの追求が記載されている。

一方国内においても、越前の松平春嶽のブレンともいえる熊本藩出身の横井小楠の「公」を価値基準とした共和政治を海舟が深く理解・尊敬し、自身の立場の強化にあたった。このように、海舟は当時の幕府官僚のなかでも最も先鋭的な立場にあったといえる。

幕末時の多くの幕府官僚群の旧態依然たる考え方のなかでは、海舟の提言が最も具体的解決策を含んでいて、世界の中の日本の立場を最も良く理解しており、このことが慶喜より難題処理を任せられた要因と思われる。

幕末時、イギリス・フランスを中心に海外との交渉も非常に重要な局面であったが、最終的には海外勢の介入を招かず、国内限りでの政権交代を推し進めた点は、「公」の基準を頑なに守った海舟の政治的手腕といえる。海舟は幕末時の大きなできごとである大政奉還を幕府の「公」、王政復古を薩長の「私」と捉えている。

海舟については、薩長、佐幕のいずれの方面からも批判はあるが、政治の失敗が戦争となる現実からみれば、江戸百万人の民衆の被害を最小限に抑えて無血開城を果たし、政権交代としては異例な被害の少ない決着となったのは事実である。このように海舟の活動は、江戸時代を突き抜けており、それが明治以降の海舟の活躍につながったものと思われる。

振り返ってみれば、微禄無役の旗本が、蘭学修業を認められて次第に地位が昇ってきて、傍系官僚の軍艦奉行にとどまり、政権の中枢部には入れなかった。本当に政権を切り回し

たのは、鳥羽伏見の敗戦で慶喜が東帰してからである。つまり、幕府が倒れると決まってから、その後始末に手腕を発揮したのであった。

明治期の啓蒙思想家であった福沢諭吉も、幕末時には幕臣(外国方)であり、慶応2年(1866年)発表の「長州再征に関する建白書」においては、外国の力を借りてでも長州藩を屈服させるべきとの將軍絶対君主論の立場に立っており、これは国内の争乱に外国勢力が介入するのを徹底的に排除しようとした共和政治論の海舟の考え方とは対極の考え方であった。海舟はこれについて、「徳川幕府あるを知って日本あるを知らざるの徒……」と述べている。

又、諭吉は明治34年(1901年)発表の「時事新報」において明治政府の高官となった幕臣の海舟及び榎本武揚に対し、「瘦我慢」の説をもって批判した。「敗北や死を厭わず一途に徳川家に尽くす三河武士こそ武士道の体現者である。殺人散財は一時の禍にして、士風の維持は万世の要なり。即ち、徳川は徹底的に抗戦し、最後は江戸城を枕に討ち死にすべきだった。更には、前朝の遺臣は新王朝に仕えて枢要の地位に昇るべきでなく野に隠れなければならない」との内容。諭吉の海舟への再度の反論催促に対し海舟はこう答えた。「行蔵は我に存す。毀誉は他人の主張。我に与らず、我に関せずと存候」政治家の海舟と評論家の諭吉の違いであろうか。

参考文献

- 『幕末・維新』 井上勝夫 岩波新書 2006
- 『幕末から維新へ』 藤田覚 岩波新書 2015
- 『ザ・タイムズにみる幕末維新』 皆村武一 中公新書 1998
- 『幕末社会』 須田努 岩波新書 2022
- 『幕末日本と対外戦争の危機』 保谷徹 吉川弘文館 2010
- 『オランダ風説書』 松方冬子 中公新書 2010
- 『日本外交史』 石井孝 吉川弘文館 2010
- 『幕末外交と開国』 加藤祐三 ちくま新書 2004
- 『開国前夜の世界』 横山伊徳 吉川弘文館 2013
- 『明治維新』 青山忠正 吉川弘文館 2012
- 『世界史のなかの近代日本』 山風秀雄 山川出版社 2023
- 『勝海舟の蘭学と海軍伝習』 片桐一男 勉誠出版 2016
- 『一外交官の見た明治維新』 アーネストサトウ 岩波新書 1960
- 『氷川清和』 勝海舟 勝部真長編 角川文庫 1972
- 『勝海舟』 松浦玲 筑摩書房 2010
- 『勝海舟』 松浦玲 中公新書 1968
- 『勝海舟と西郷隆盛』 松浦玲 岩波新書 2011
- 『西郷隆盛』 家近良樹 ミネルヴァ書房 2017
- 『徳川慶喜』 松尾正人 山川出版社 2011
- 『その後の慶喜』 家近良樹 講談社 2005
- 『福翁自伝』 福沢諭吉 岩波書店 1991
- 『勝海舟と福沢諭吉』 安藤優一郎 日本経済出版社 2011
- 『幕末の海軍』 神谷大介 吉川弘文館 2018
- 『ペリー来航』 西川武臣 中公新書 2016
- 『百姓たちの幕末維新』 渡辺尚志 草思社 2012
- 『横井小楠』 徳永洋 新潮新書 2005